

## 卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	マルチリンガル子ども哲学—公正な教育という観点から—
氏名	上原 みなみ／大神 茉莉／徐 子恒
メジャー	言語教育／言語教育／言語教育
マイナー	言語学／法・政治学／言語学
<p>(要旨)</p> <p>近年、文化的言語的に多様な背景をもつこども（Culturally and Linguistically Diverse Children、以下、CLD のこども）が増加している。しかし、CLD のこどもは、日本での教育の機会が公平な形で与えられていないことが多い。とりわけ学校環境において、CLD のこどものもつ言語能力が日本語のみで測られがちであることから、実際の言語能力が理解されにくい状況がある。本研究では、こうした課題に対し問題意識をもち、CLD のこどものもつすべての言語ないし文化を資源と捉える必要があると考えた。特に、幼児からの適切な支援が重要であると考え、筆者らは、調査と実践を並行して行なった。</p> <p>調査については、まず町田市における CLD の幼児の実態調査を市内の保育園でインタビューを通して行った。また全国の就学前の CLD 幼児を対象とした日本語教室の実態についても、全国 1741 自治体の HP 調査を文科省の調査結果と照らし合わせて行った。</p> <p>実践では、オフィーリア・ガルシアが提唱した「トランスランゲージング教育論」、文部科学省が 2025 年に公開した「文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のためのことばの発達と習得のものさし」、マシュー・リップマンが提唱した“Philosophy for Children”という 3 つの理論、手法を駆使し、5 歳～9 歳のこどもを対象とした「マルチリンガルこども哲学」を実施した。</p> <p>この実践では、参加者全員で椅子のみを使用して丸くなり、全員の顔が見えるように座る。そしてファシリテーターによって、あるテーマに対して、全員でゆっくり、じっくり考える対話を行う。このとき、1 つの答えや正解を探そうとするのではなく、テーマや他の人が話したことに対して考え続けたり、問うたりすることを重要視する。そして、CLD のこどもが自分の言語資源をすべて活用できるよう、どんなことばを使用しても、どんな表現方法を用いても肯定する。</p> <p>実践の企画・運営は、2025 年度の川田ゼミの学生 8 名、桜美林大学の教員 1 名と協働しながら行った。2025 年 5 月から 12 月にわたり、計 19 回、オンラインで「マルチリンガルこども哲学」を実施した。また、11 月、12 月は対面で実施した。毎回の実践では、異なるテーマを設定した。テーマは、NHK for School による「Q～こどものための哲学」やピーター・ウォリー（2023）『もし友だちがロボットだったら？—哲学する教室のつくりかた 30 の授業プラン』から設定した。</p> <p>実践をしていく中で、以下のような課題があげられ、それについて考察した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、こどもの声を聞くには</li> <li>2、CLD のこどものすべての言語資源を活用することと哲学対話の両立</li> <li>3、ファシリテーターのあり方</li> </ol> <p>これらの調査、実践から分かったことをもとに、公正な教育を目指すために大学生ができることを提案した。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント) 本研究は、日本社会で使用される「ことば」をめぐる力関係に着目し、その関係性の中でとりわけ脆弱性・被傷性に晒されやすい CLD のこどもたちの「声」を傾聴することで、その社会的情動の発達を支える取り組みのあり方を検討した挑戦的な実践研究です。本研究で浮き彫りとなった学生たちのジレンマは、日本語至上主義社会への問題提起の現れであり、こうした中で生まれた学生たちの日本社会への問いかけに一人でも多くの方が応答し、生きやすい社会へと近づいていくことを切に願います。</p>	